

## 無声の詩—3—有声の絵

八十一才、乾山最晩年の作品である。乾山が住みなれた京都を去って、失意のうちに江戸に下ったのは六十九才のことであった。

これは江戸の風物に意を得たもので、乱笥の内側には隅田川の浜千鳥が、外側には武蔵野のすすきが画かれている。こうした江戸の風物との心の語らいのうちに、乾山晩年の詩情豊かな作品は生まれた。

浜千鳥は金泥、波と蛇箒は墨、風にそよぐすすきは、白く、赤く、青く彩られ、素朴な桐木地の上に天稟の筆によって構図された。ここにわれわれは、隠逸の文人乾山が、現世に決別する沈痛な調べをききわけることができるのである。(重要文化財)

彩画乱笥〈乾山筆〉木製27.5×27.4×高さ5.8cm



季刊 美のたより No.3

昭和42年10月1日

発行 大和文華館